

第 2 章 事前活動



第65回日米学生会議 事前活動

第64回報告会、第65回説明会

日時：2012年12月8日（土）

場所：慶應義塾大学 三田キャンパス

概要：

第65回会議実行委員会が発足して約3カ月、第64回日米学生会議報を開催した。報告会ではまず、会議報告に先立ち第17回日米学生会議参加者である今井義典氏に「星と共に」という題でこれまでのご自身の記者としての活動についてお話いただき、メディアによる冷静かつ迅速な正しい情報の発信の大切さ、世界をつなぐ人材の重要性について若者への熱いメッセージを頂いた。続く第64回会議報告、パネルディスカッションでは多くの写真やムービーを通して当会議のアカデミックな側面だけでなく、異文化交流、共同生活について紹介することができた。また、報告会は第65回会議概要について初めて公式発表する場でもあった。説明会終了後のご来場の方々との交流の時間では、第65回日米学生会議への関心の声を数多く聞くことができた。

第65回日米学生会議 選考会

第一次募集（1月19日～2月24日）

第二次京都選考会（3月12日～13日）

第二次東京選考会（3月20日～23日）

場所：同志社大学（今出川キャンパス）、
日米会話学院

概要：

1月15日よりWebページでの一次小論文の受付を開始し、一次小論文の結果、2次面接に進んだ応募学生に対し、グループデ

ィスカッション、個人面接、教養試験を課した。

春合宿

日時：5月5日（日）～5月7日（火）

場所：国立オリンピック記念青少年
総合センター

概要：

4月の選考委員会により最終決定した28名の参加者と8名の実行委員が、春合宿にて初めて顔をあわせた。本合宿において参加者は日米学生会議の歴史を学び、ディベートワークショップ、分科会活動などの「日米学生会議の基礎」を学び、8月の本会議に向けての最初の一步を踏み出す機会となった。



アイスブレイクを楽しむデリ

<コンテンツ>

日米関係勉強会

去年のAECの方が日米安保のレクチャーをして下さり、その内容に関してディスカッションを行った。コミュニケーションツールとしての英語ではなく、高度な議論をする上での英語力の乏しさを痛感した。更に日米関係に限らず、日々自分の周りで起こっている事柄にもっと目を向け、勉強しよう、と思った。（伊井佐織）

日米安保について考えさせられる話題は日々満ち溢れているにも関わらず、実際に深く考え誰かと議論する機会はなかった。今回のレクチャー及びディスカッションでは、日米安保の重要性だけでなく、それに対して一人一人が知識を深め、自分なりの意見を明確に持つことの大切さについてもっとも考えさせられた。(兼子莉李那)

東海大学綾部功准教授によるディベートワークショップ

最も印象に残ったのは、講師からの問いに対し、積極的に発言する参加者の数が多いことだ。積極的に発言することは議論を深める上で欠かせないと考えており、この雰囲気の本会議終了まで持続するために、私も積極的に発言し一翼を担いたい。

(荒木尊士)

ディベートワークショップでは、議論する難しさを痛感した。日本語でも、自分の言いたいことを相手に正確に伝える事、理解してもらう事は容易ではない。そのディベートを英語で行うのはさらに難しかった。

また、自分の知識不足も改めて感じた。テーマに関する知識を深め、根拠を上手に示して、より説得的な議論が展開できるようにしていきたいと、強く思った。

(小林薫子)

<春合宿感想>

春合宿では素晴らしい仲間に出会えたことが何よりも自分への刺激となった。様々な分野で活躍されている OBOG の方、個性豊かな実行委員会と同期のみんなに出会えたことは自分を改めて考え直すきっかけに

なったと思う。春合宿で対面した一人一人に圧倒され、自分の能力が劣っているのではないかと不安を覚えることが多かったが、JASC に参加するからには本当に頑張りたいという気持ちが強く湧いた。この初心を忘れずに今後も気を引き締めて様々なことに挑戦していきたい。(野口真央)

いよいよスタートした日米学生会議。「何をするのか、どのような人がいるのだろうか」と不安に思っていた私だが、初日から盛りだくさんの日程で、いつの間にかそのような不安は吹き飛んでいた。とにかく目の前のことに精一杯取り組んだ。たった3日間の合宿であったが、最終日には JASCer 一人一人に対して「思いを素直にぶつけていいのだ」と思えたことは、私の最大の驚きであるとともに喜びであった。(中澤彩)

全体として、デリのみんなと3日間という短い機関にも関わらず、濃密な人間関係を構築することができた。これが一番の成果であった。

様々なバックグラウンドを持つにも関わらず、36人全員が同じ「JASC」というものに正面から全力で取り組んでいることが分かった。このことは、リフレクションという全員の気持ちを率直に聞ける場を最後に設けてもらえたことで再確認できた。春合宿全ての活動の中で、リフレクションの時間が一番良いものであったと思う。

(吉田知史)

<春合宿を終えての意気込み>

この3日間の春合宿を終えて気持ちの面で非常に成長したと思う。こんなにも様々

第2章 事前活動

な体験をしてきた人と会うのは初めてで、自分あまりにも世界を知らないということに気付くことができた。このような人々に出会う機会に恵まれたことを本当に嬉しく思うとともに、私も他の人から尊敬されるような人間になりたいと思った。そのような人になるためにもこれから夏の本会議までの間にきちんと勉強したいと自然と思うようになったのが一番の自分の中での成長である。これからしっかりと知識をつけ、自分の軸となる考えを構築していきたい。日本側の参加者との交流がこれだけ刺激的だったので、アメデリと会うのが心の底から楽しみだ。早く日米の学生間で議論をしていきたい！（橋本萌）

この春合宿では、今まで謎に包まれていた JASC の正体がだんだんと明らかになっていく感じでした。これから先の JASC のことが具体的にイメージできるようになるにつれて、期待や興奮が高まったと同時に、責任や負荷を感じて不安も大きくなったことは事実です。

けれど、個性豊かなデリと、明るくて暖かい EC に出会えたことが、春合宿全体を通して一番嬉しかったことであり、これからもパワーの源になっていくと思います。この仲間とだったら頑張っていける、頑張っていきたい、と思いました。（森泰子）

JASC は *life-changing experience* と言われる。しかし、痛感するのは JASC に参加して「人生は変わる」のではなく「人生を変える」という心持ちでなければいけないということだ。春合宿で会った OB の 1 人が JASC を中途半端でやってはいけないと

おっしゃっていた。 *Life-changing experience* にするためには主体的に思いっきり打ち込まなければそれを達成することができない。一生懸命打ち込みたい。

また、JASC の魅力として「仲間」がいる。人間として尊敬できる仲間が JASC にはたくさんいる。さらに夏には大勢のアメリカ人が来る。このような素晴らしい環境のなかで深い友情、絆を築き、一生の友を作りたいと思う。

自分色を少しでも JASC に反映させるとともに、最高の仲間と今までで最高の JASC するために頑張りたいと思う。

（川口真）



OB と交流をするデリ

防衛大学校研修

日時：6月7日（金）

場所：防衛大学校

概要：

日米学生会議では毎年、日米関係を考えるにあたり重要な「安全保障」に関する知見を深めるため、防衛大学校に訪問し、教授より特別講義をいただくと同時に、同世代の防衛滝学校生との対話と交流の機会を設けている。本年度は加藤教授と坂口教授による二つの講義に加え、施設見学、そしてディスカッションが行われた。

- ー加藤准教授講義
- ー防衛大学校施設見学
- ー坂口教授講義
- ー分科会討論
- ー懇親会

＜参加者感想＞

何よりも、自分と同年代の若者が、日々厳しい環境の中で、学業のみならず訓練にも励んで生活しているという現実には衝撃を受けた。防衛大生の一挙手一投足を目の当たりにするにつけ、日頃の自分の生活がいかに生ぬるいものであるかを感じざるを得なかった。今まで、日米学生会議や大学内で日米関係や安全保障、戦争等について議論することはあっても、あくまでもそれは頭のなかのイメージで語っていたに過ぎず、リアリティを持つものではなかったが、今回防衛大を訪れて、「彼らにとっては自衛隊や国防というものが自分たちの生活・人生と直結する大きな問題なのだ」ということを実感した。今後沖縄での自主研修や、本会議で日米安保などを議論するにあたり、今回防衛大研修で得られた知識や体験を活かすことでより深い次元で物事を考え、議論できるのではないかと信じており、またそうできるように一層努力したい。

(鈴木悠司)

私の身の回りには防衛大に進学した人もいないし、話題に出ることもほとんどなく、防衛大は私にとって完全に未知の世界だった。

今回、同年代の学生が、日本の防衛や国への貢献などを考えながら厳格な生活を送っていることを実際見て、頼もしいと素直

に感じた。また私自身の気持ちも引き締まり、日本人としての誇りや責任感はしっかり持ち続けたいと思った。近年、君が代の強制で揉めたり、また、日本人は平和は当然に続くものと思いがちな部分があるが、今回の防衛大研修を通して、そのような意識を持ち直していくことが大切だと思った。防衛大生との議論で、「平和＝何もしない、ではない。平和でいるために必要な行動はとるべきだ」という言葉が印象に残っている。

初めての世界に触れ、防衛大生の強い意見と信念に触れ、沢山の未解決な疑問点が生まれた。8月の本会議に向けての事前準備、そして本会議を通して、それらの疑問点としっかり向き合っていきたい。(森泰子)

また疾風の如く過ぎていった一日。どうして JASC の行事はこうも毎回、充実感と空虚感を同時に残していくのだろうか。加藤先生、坂本先生お二方のご講義、防衛大学構内研修、分科会ごとの discussion、レセプション。一日にこなすにはあまりにも贅沢な内容であった。防衛大の門の向こう側には非日常があった。その非日常を日常として日々生きている学生は言動の一個一個にまっすぐな芯が通っているように見受けられた。しかし、そうした彼らにも私達と変わらない部分はある、意外でかつ、嬉しかったのを覚えている。彼らと一日の生活を共にし、白熱した議論を交わすことができたのはとても貴重な経験であったとしかいえない。本当に楽しかった。今回の研修は特に JASC でしか経験できないことがたくさんあったので、この機会、そして研修を支えて下さった皆様に深く感謝してい

る。(吉井拓眞)



防衛大学校の皆様と

沖縄研修（学生有志活動）

日時：6月21日～23日

場所：沖縄県（キャンプフォスター、沖縄市、沖縄尚学高等学校、辺野古、沖縄平和記念平和公園、クラシンジョウ壕、荒崎海岸等）

<沖縄研修目的>

第65回日米学生会議では、在沖米海兵隊基地や、辺野古、沖縄全戦没者追悼式を訪問し、今年8月に日本で開催される本会議に向けて沖縄研修を行った。未だに日米関係の多くの課題が色濃く表れている沖縄。日米安全保障条約の名の下に在日米軍施設の74%が集中している。太平洋戦争で激しい地上戦が行われた歴史もあり、普天間基地移設問題やオスプレイ配備、高江のヘリパッド移設問題など今なお多くの喫緊の課題を抱えている。今回の沖縄研修では、今後の日米関係を考える上で非常に重要である沖縄に実際に足を運び、沖縄の現状や、沖縄とアメリカ双方の人々の思いを、直接的な体験を通して学び、基地問題や安全保障に関する見識を深めることを目的とした。そして、事前学習、現地訪問、事後学習を

通じ、今後の沖縄の在り方、そして今後の日米関係をどうより良くしていくべきかを考察し、本会議において、アメリカ人学生との意見交換やアメリカ社会への発信を的確に行い、沖縄問題への理解を深め日米両国の相互理解に寄与することができるよう、その土台の構築を目指した。

【6月21日（金）】

-在沖米海兵隊基地キャンプフォスター訪問

-沖縄市コザヒストリート見学

-リフレクション

■参加者の声

私にとっての沖縄研修一日目は、一言で言うとぐちゃぐちゃ、であった。私は沖縄県出身で、米軍基地には何度か入ったことはあるが、やはり何度入っても基地は「Small America」であると思った。今まで米軍の人と交流する機会があったが、真剣に米軍の基地に対する考えを聞くことはなかったので、海兵隊員のロバート氏の講義は貴重な経験であった。米軍側の言い分もよく理解し、納得できるが、「しかしなかなかあ・・・」と心にひっかかる所があり、基地ツアー中ずっと考えていた。ちょっと話がずれるのかもしれないが、今年東京に上京してきて思ったのは、私は沖縄の代表なのだということだ。今までは沖縄県内にいたからあまり感じなかったが、一步外に出るとたちまち私は沖縄県の代表としての責任があることを感じた。だから皆に基地についての意見を聞かれたときに、自分の意見ではなく沖縄県民としてどう答えるべきなのだろうという考えが常に胸にあった。

しかし皆が聞きたいのは、私はどう思うのかということで、そのことに気づいた時に、あ、私って実は全く基地について考えてなかったのだと、非常に落ち込んだ。まだ整理はできていないが、私の意見は、基地が必要なこともわかるが、でもなぜこんなにも基地が必要なのか、なんでこれほどの基地が沖縄にあるのだろう、ということだ。

一番問題視すべきは、沖縄に私みたいになんとなくしか考えていない若い子が多いことではないかと思った。基地は私達が生まれたときからずっとあり、基地がある状態、ヘリが大きな音をたてて頭上を通過していくという状態が当たり前過ぎて、今更あまり考えることは無いのだろう。しかしもっと県外の若者や米軍側の意見を交換する機会を持つことにより、私達は何か気づきを得られるのではないかと考えた。まだ胸の中ぐちゃぐちゃだが、気づくことが出来て本当に良かったと思う。知らない、考えてないということを感じさせてくれて、本当にみんなありがとう。(上江洲仁美)



沖縄の学生とディスカッション

【6月22日(土)】

- 名護市辺野古見学
 - 沖縄フォーラム
 - 沖縄全戦没者追悼式前夜祭
- 沖縄研修の二日目は、沖縄の大学生・高校

生と交流しながら、辺野古の見学、そしてその後沖縄尚学高校にて沖縄の基地問題と日米関係についての講演を聞き、ディスカッションを行った。普段、ニュースで議論されている沖縄の基地問題の生の現場を自分の目で見ることができ、また現地の人たちが基地問題を日常感覚のなかでどのように感じ考えているのか、ということに触れられた貴重な体験であった。この日の研修で知ったことは、日米間、そして沖縄の中においても人びとの意見は多様だということ、またそうした中でもなんらかの形で目の前の問題に対処していかなければならないという難しい現状があるということだった。同じ日本でありながらも、こんなにも身近に基地問題を感じ、また考え対峙している人たちに会い、改めて、自分自身の立ち位置を問い直されたように思う。

(大日方望)

【6月23日】

- ひめゆりの塔見学
- 韓国人慰霊塔見学
- 沖縄県立平和記念資料館見学
- 沖縄全戦没者追悼式
- クラシンジョウ壕見学
- 魂魄の塔見学
- 荒崎海岸見学

■参加者の声

3日目のひめゆりの塔や平和祈念資料館の見学では、戦場舞台となった沖縄の悲惨な歴史を改めて実感した。戦争に兵士として派遣され、亡くなった少女達の写真が並ぶ部屋に入った時は複雑な気持ちでいっぱいになり、自分より若い13歳という年齢で

第2章 事前活動

戦場に派遣され、想像もつかないような恐ろしい環境で命を落とした彼女たちのことを考えるととても心が痛んだ。その後、沖縄前戦没者追悼式に参列した際にも、もう二度とこのような歴史を繰り返してはならないと考えた。

午後は沖縄のガマや海岸を訪れた。特に思い出に残っているのは荒崎海岸の岩の上を炎天下の中みんな歩いたことだ。3日目の疲労と暑さになされて足を踏み外さないように海岸の岩を渡っていくのはまるでサバイバルゲームのようだった。綺麗な海を見る余裕もなく必死に歩ききったが、今振り返ると本当に楽しかった良い思い出。3日間はあっという間で、待ちに待った沖縄研修が終わりを迎えた時は寂しい気持ちでいっぱいだった。現地に直接行って学ぶことは自分の想像以上に得るものがあり、最高の仲間とそれを分かち合いながら過ごすことが出来て非常に充実した3日間を送ることができた。



荒崎海岸を歩く

事前勉強会

第1回：2013年6月8日(土)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

第2回：2013年7月14日(日)

場所：国際教育振興会

概要：

第65回会議では有志による自主勉強会を2回開催した。第1回勉強会では、2週間後に控えた沖縄自主研修に向けての知識補完と、本会議の雰囲気味わってもらうことを大きな目標とし、所与のテーマに関して英語でディスカッションを行った。

沖縄自主研修の3週間後に行われた第2回勉強会では、本会議に向けての最終準備と参加者の主体性を養う場となることを期待して、前半は自主研修を通して学んだことの振り返りとその成果について考察し、後半は参加者たちが自由にトピックを決めて英語で議論を行うスペシャルトピック形式でのディスカッションを行った。

<参加者感想>

日米学生会議では8月の本会議が最大の見せ場ではありますが、今回の事前勉強会を含めた事前準備活動が本会議での成功を決めるといっても過言ではないと思っています。第1回の勉強会では沖縄へのフィールドトリップに向けて、基地問題や沖縄の人々の考えや思いへの理解を深めていきました。自分を含めて、みんなが身を乗り出して発表者の話を聞き、本気でディスカッションをする姿を見て、社会問題を考える高等教育機関で学ぶ大学生としての意義を再発見できました。

また本会議に向けての英語ディスカッション練習も非常に有意義なものになりました。

僕のグループでは日常のフランクな議題で議論を交わしたのですが、議論の楽しさと同時に英語で表現することの難しさを学

びました。質の高い議論を本会議でも維持するために、英語力向上も意識していきたいと思います。(大沼雄貴)



勉強会の様子

勉強会総括

第1回勉強会では、前半に沖縄自主研修事前学習の時間を設けた。沖縄自主研修スタッフの中から勉強会担当者を選び、事前資料の作成と当日のプレゼン発表を任せました。スタッフに沖縄出身の参加者がいたこともあり、プレゼンにはデータに基づく客観性と「地元暮らしの視点」が上手に反映されていた。参加者からも活発に質問の手が挙がり、双方向の学びがしっかりと実現されていた。米軍基地見学や新基地建設予定地の見学、地元の教授陣からの講義や学生との交流など様々な企画が用意されている自主研修を、「目的もなくただ行く」だけの自主研修としないように、参加者それぞれが沖縄に研修として行くことの意義と、この機会の重要性を考える材料を提供することができたと強く思う。

後半は、4つのグループに分かれて英語でのディスカッションを行った。勉強会担当者であらかじめ決めた10個のディスカッショントピックから、グループごとに好きなものを1つ選び、所与の時間内で自由に議論した後、他グループに発表をすると

いう形式で2回行った。本会議での議論をイメージする良い機会となっただけではなく、デリ同士が英語で議論するのは初めてであったこともあり、お互いに良い刺激となったようであった。

第2回勉強会は、午前中に沖縄自主研修担当実行委員による沖縄自主研修の振り返りを行った。2泊3日の研修内容を1日ずつ振り返り、地元の人から受けた講義や現地で見たこと、またそこで感じたことや考えたことなどをグループに分かれて共有し合った。

昼食を挟み、午後は本会議のスペシャルトピックと同じ形式で、事前に参加者から集めたテーマの中から議論したいトピックを1つ選んでもらい、トピックごとにグループに分かれて英語ディスカッションを行った。どのグループも第1回勉強会の時より盛り上がりを見せ、難しく奥が深いトピックについて真剣に議論を交わしており、本会議に向けモチベーションを高めることができたように思う。(飯島千咲)



英語でディスカッションを練習

第65回日米学生会議直前合宿

日時:2013年8月1日(木)~8月2日(金)

場所:

立命館大学びわこ・くさつキャンパス

第2章 事前活動

立命館大学 BKC インターナショナルハウス

概要：

日本側のみで行われる最後の活動プログラムである直前合宿では、翌日から始まる第65回日米学生会議本会議に先立ち、一ヶ月に渡る共同生活に欠かすことの出来ないルールの確認や、本年度の4つの開催地でのプログラムとスケジュールの情報共有、そして分科会毎にこれまでの事前活動のまとめの発表を主に行った。各分科会が3ヶ月の学びの成果を英語で発表し、他の参加者よりフィードバックを受け取ることで、本会議での目的意識を高めることが出来た。

また、例年行われている文化交流の一環であるスキット（寸劇）の練習を参加者主導で行い、本会議に向けて日本側参加者の絆をより一層深めることができた。そして、アラムナイの方々による激励のお言葉、そして一人一人が自分の気持ちを語るリフレクションを通して、伝統ある会議の参加者としての自覚もち、新しく会議をつくるという熱い想いを全員が共有することで、一致団結して本会議へと向かう契機とすることができた。（市毛裕史）

